

日本
反政治
詩集

編集委員

● 猪野健治

寺島珠雄

長谷川修児

向井孝

まえがき

このアンソロジーを進行させるについて、私たちは全国の同人誌、サークルの詩の書き手たちの作品ばかりでなく、ふだんは詩や文学にほとんどかかわっていない人々の、機関紙・誌、ミニコミからピラの断片にまで、できるだけ広く目を配ることを心がけた。

そこには、状況をもつとも鮮烈に反映するのは詩だ！ という考えがまずあった。そして、そういう詩、あるいはさらに状況の先取りすらした詩とは、必ずしも文学としてのいわゆる詩の概念に適合したところのみは存在しない、いや、概念をはみ出したところに

こそむしろ本来的な詩があるに相違ないという判断の支えもあった。つまり私たちは、生身で渦中にいた者の凱歌（これはある筈もないが）、悲憤、怨念、羞恥、ふてくされ、開き直り、シラケ等々までを、状況の証言として集積するようにしたわけだ。

そうした作業過程のなかで、あきらかになつた七〇年代の特徴を、私たちは「反政治」という言葉に集約した。

いま、私たちが生きている時代の状況はすこぶる捉え難いものとして、ある。

六〇年から今日にかけてあらわれた安保闘争、ベトナム戦争、大学紛争、沖繩問題、日中復交、公害問題等々の、カオス的なきわめて政治的な問題のなかで、それらとじかにかかわるか否かに関係なく、意識するか否かにすらも関係なく、私たちはそこに棲息するしかないという政治的現実の下にある。

「反政治」とは、そういう現実のなかの私たち総体があらわしている現代的状況なのだ。

六〇年安保闘争の場合は、岸政権を打倒して、それに代るよりよ

き政治体制を！ ということが根底にあつた。つまり非常に簡明に政治的であり、そのために、岸が消えたとき闘いは愚図々々と消滅の方向へ赴くしかなかった。昂揚からなしくずしの退潮へ……。そのとき浮びあがつてきたのは、政治不信、政治嫌悪の風潮である。だがそうしたいわば「非政治」傾向は、政治からのがれる、遠ざかるという姿勢である限り、実は日常卑近の政治に包括されてしまふ性質から脱することはできない。六〇年代前半にみられた一種の政治的安定はそこから生れ、資本の無限的な繁栄ムードはその証明としてあつた。

そういう状況下にいわゆる七〇年闘争を経過して今日に至るなかで、あらたに起つてきた政治のがれ、政治ぎらいの現象は、前に述べたような「非政治」傾向とは、はつきりとその根ざすところが違つている。

そこでは、これに代るあれという、ベストではないがベターな政治体制への要求はない。大まかな傾向はあるが性格としての一定性をもたず、組織を志向しない。合理的あるいは科学的と呼ぶより

は感性的であり、行動的である。伝統的な真・善・美に対してはフザケ、カラカイ、ヒヤカシが先行している。

これらは、いわゆる従来概念でいう建設的という言葉、生産的という言葉に背いて、まったく無目的であり、なんの役割も自己に課していない。まさに不羈奔放でとらえがたい、しかしそのためこそ閉塞した現代社会をつきぬける未知の出口を予見させるものといえよう。

もちろん、私たちは、いまあげたような傾向とは別のまことに政治的な生き方のパターンも、広く民衆のなかにあることは否定しない。だが、それゆえにこそ詩が状況を先取りするということが明らかにされるのであって、政治の涯に身を行きつかせるまでもなく、行きついたときの絶望と解体を表現しているのが、少なくともそうした表現に達する可能性を胎んでいるのが、この一冊の物語る日本の七〇年代状況なのである。

これを単に破壊的とか虚無的とか概括することの危うさにも一言しておくなら、このように「反政治的」な、解体的な日常が、民衆

それぞれの数だけ営まれることこそ、いま、私たちに予測できない新しい社会の創造性への期待ともなるのである。

*

私たちの呼びかけに応じてくれた人々、私たちの方で収集した雑誌、機関紙、ピラ、ポスターなどは総計約三千点に達し、そのすべてを約一年にわたって綿密に検討を加えた。

このようにしてすすめられた過程は別に述べるが、編集を終つたいま振り返つていえるのは、欠落を持ちながらなお、私たちの発想は相当程度この一冊に結実したのではないかということである。

政治史や運動史を人間性によって増幅するものとして、ここに私たちは「日本反政治詩集」を提出する。

一九七三年七月 「日本反政治詩集」編集委員会

まえがき……………1

第一章 言いたくないことの一部

- 日本人へ・照屋美佐枝……………15 言いたくないことの一部・北野昌子……………16
- 逃亡しよう・佐久間章孔……………18 男はつらいよ・無署名……………20 雨にもまけず・榊川濁……………22
- デモ ゴゴ ロクジ・岩永和朗……………24 やせのおおぐい・土呂耕……………27 石・山口昭治……………28
- そるばつてん海に行きたかと・津森太郎……………30 羊山公園・大崎憲二……………32
- 時代転換の地揺れ・小田天界……………34 マンザイ・上原章裕……………36 帰路……………藤田励治……………38

第二章 羞恥心は反革命的である

- 詩・きよこ……………43 日ッ本・にしじゅんこ……………44 なあにかいい事・嶋田豊……………45
- 「ざあ・せつくす」より・無署名……………46 アレ・境勝……………48 春庭花・上野菊江……………50
- 肉体は語るだろうか・伊東由季……………51 おへその上の詩・和本公一……………54
- 裸像・藤本恵子……………56 二人寝の子守唄つて何か母に聞け・ひのもと……………60

第三章 怒りがゆく

- すわりこむと・松浦英政……………65 たたかいの歌・東野伝吉……………66
- 民主主義の町を出よう・長田大生……………71 口を引き裂いてやりたい・武田豊……………75
- 過去を現在から解放せよ・田村正敏……………76
- 11・30 糟谷君人民葬をへ生への出発点とせよ!!・無署名……………78
- けいさつかんのじんけん……………あいかわみちこ……………80 治外法権・長船青治……………83
- こえ・多田たか子……………86 戦士のうた・白川透……………88 ある抗議集會にて・橋本幸宏……………92
- 弁証法・星国夫……………92 優しいうた・ノオトより・條冬樹……………94 眼・加藤昌一……………96
- 文連常任委員会アピール・土方知巳……………98

第四章 静寂はきなくさく

- 一枚の報道写真・真島憲治……………103 中間総括(N+1)・真木徹……………105
- 菊の紋章一九七一年・山岸重治……………108 父の日記・北川清……………110
- ヒロシマの空・林幸子……………112 未来学風のインタナショナルなバラード・長岡弘芳……………113

咲いた日に・品川美智子……………116 内難射撃場(金沢一九六一年)・猪奥光愛……………118
パウロ六世に小さな叫び・吉田正人……………120 覚書ノート・小池鉄夫……………122 朝・金丸樹一……………124

第五章 労働現場から

ふりかえつたら うんざりした・山野治……………127 掌―皮革工の―・村上弘一……………132
紡績工場周辺・きとよしみ……………134 社長がやってくる・岡本栄……………136
運河を渡ると・小西誠……………138 木材工場(5)・向井清子……………144 生・井上弥寿夫……………146
胴割れ・杉谷昭人……………148 ……と想つたわな・佐藤攻……………149

第六章 死体焼却夫への恋歌

死体焼却夫への恋歌・小野妙子……………157 洞穴の中に・大門鉄……………160 穴を掘る・上野智司……………161
おれたちの非プリズム・大屋好子……………163 ドームのうた・泉谷国嘉……………165
あたしの内なる神聖はくずれ・堀本吟……………168 「薔薇通信」より・藤本菜穂子……………171
…使いたくない・渋谷修三……………172 異国・高山博……………174 最後の意志・紫色すみれ……………176

第七章 おおげさだなあ

のびたつめ・関口明男……………181 おおげさだなあ・すぎたけし……………182
オレたちの村を創ろう・無署名……………184
悪しき連帯を断ち切り孤独のさすらいに立て・内藤勝也……………186 闘いに・神田賢一……………189
「作品2」・清野浩志……………192 青空・川瀬健一……………193 卒業するものたちへ・たかはらおさむ……………194
カレライスに寄せて・赤垣幾代……………196 別離・佐伯正博……………198 歩く者・清水豊……………200
去り行く友へ・丹山清英……………201 友へ・早川じゅん……………202

第八章 殺戮レモン

狂詩・世界の終りのまえに・なかやまみさお……………207 殺戮レモン・石上弘美……………213
ミスター・モウズグ・阿志津みづえ……………217 兇状記・信人……………218
12時はんにたべよ・浅田賢……………223 赤い提灯・竹内正企……………226 プロ9・夏輪絹……………228
いんたびゅう「稲木豊実氏の現代」自問自答・稲木豊実……………231
坂・北見哲哉……………233 謹賀新年・玉岡松一郎……………235

第九章 木偶と王様

- 雲は囁みしだく・たなかよしゆき……239 ハタチ・林洋子……242
街がしょんべんでぬれるわけ・山一兵……244 消しゴム・すずきやすまさ……246
天気のごあい・中島明子……248 十円銅貨・角谷龍一……250
ケツコン ショー ヨ・小林和巳……252 少年の海・香川善彦……254

第十章 ひきあわん・ひきあわん

- 村の女・浜川弥……259 マビキ・山本幸男……263 秋のこと・草階俊雄……264
東九反田・秋・大崎弟……265 めいあん・奥田和代……266 或る村の池・山本耕一路……268
唐きび・池地アヤ子……271 花・山野すみれ……273 納屋・田村由美子……274
そら「亡き父の記」・叫一輝……277

あとがきにかえて……282